



◇

「ちくしょう…」

足下の崖を見下ろし、唸るように北山が呟いた。

ヨシオが教えた洞窟への道は無かった。

登山に使うようなザイルが所々に垂れ下がっているのを見ると、元は岩場の凹凸を利用した階段状の足場だったのだろう。だが今は、途中で顔を覗かせている幾つかの丸太とザイルが切り立った崖の下に散見出来るのみであった。台風が何かの折に崩れてしまったのであろう。

「…」

声も無く周囲を見回す。

他にこの崖を降りられそうな場所は見当たらなかった。

傾斜が比較的緩くなっているここだけが唯一、下へ辿り着ける可能性があったのだ。

「北山…さん…」

おぼわれた加夏子が不安気な声を出した。

「これじゃ船までいけない…」

「降りるぞ」

「え？」

「降りる、と言ったんだ。おっこちないようシッカリつかまってる」

北山はズボンのベルトを腰から抜くと、背に回してから胸の前できつく締め上げた。

虚空に背を向け、足から崖へと踏み出す。

「無理だよ、おっこっちゃうよ！ ほかの道を捜そうよ」

「ダメだ」

「北山さんっ！」

「…間に…合わなくなる…ぞ…追っ手もくる…あの坊やも…それでもいいのか…」

少しずつ、身体を崖に這わせながら下へと降りてゆく。

右手が断崖の縁から離れた。

下を見た加夏子が息を飲むのが伝わってくる。

「見るな。目つむって、つかまる事だけ考えてろ」

「もう見ちゃったよ～」

「だったら空でも見てろ」

「そんなぁ…ケータイ小説じゃないんだから」

「なんだ…そりゃ…」

虫が這うように、二人の身体は崖を下っていった。

「車椅子、押してくれてアリガト」

「あん？」

「旅館の帰りだよ、衣笠さんちの」

「あれか、どうってこたないぜ」

「わたし…北山さんって怖い人だと思ってた、エラそうで嫌なオッサンだって…」

「光荣だね」

左手を岩角から放し、次の岩を慎重に掴みながら北山が答えた。

「でも助けに来てくれた。わたしさ…あの…」

「生きてりゃオマエとおない歳くらいかな」

「？」

「子供だよ。俺の子。もう死んじまったがね」

「北山さんって結婚してたんですか？」

少し驚いた口調で加夏子が聞いた。

「ああ…遠い昔のこったけどよ…」

◇

北山と加夏子が決死の脱出行を続けていた、同じ頃。

殉を担ぎこんだ病院を後にした真山は、日の沈んだ尾道の街を抜け山の手に向かい足を早めていた。

うかつだった

いや、向こうが一枚上手だったのか

乃木秀司が入院先から姿を消した所までは判っていた

だが、その行く先を探る暇無く仕掛けてきた清水加夏子の拉致、堀川殉への暴行

みえみえの足止めだ、幼稚過ぎて笑えるほどの

この件を片付けるのに2～3日、それ位の手間と移動時間を使う辺りに対象は居る。

無意識の内にそう思い込んでいた。組みし易い相手と侮っていた。

搜索の視点を遠くへ向ける事に何の疑問も持たなかった。

殉君がいなかったら…

そう思い、真山は腹の底が熱くなった。

プライドが少なからず傷付けられているのが血の熱さから感じられた。

遊んでいたつもりは無い

ここからはこっちも全力でいく

逃がさん

堀川殉がその特異な能力で視たものは、恐らく誘拐された佐野碧が目にした景色、視ていた風景。

それはあの旅館の近辺で見た瀬戸内の眺めと酷似していたのだ。

女の子は、衣笠恵美子の実家のすぐそばに居る

確信だった。

確信が真山をわし掴みにして引きずり歩かせていた。

◇

暗い坂道をみつつ登り、四つ目の坂を登り切れば衣笠恵美子の実家に辿り着くつづれ折りの途中で真山は足を止めた。

殺気。

針のように鋭い殺気が肌に刺さってくる。

刺さるそばから懐かしい痛みを伝えてきた。

身体は自然に構えている。どこへともなく言葉を投げた。

「邪魔するな、鴉。今はお前と遊んでる暇は無い」

「礼をいっておく」

「なに？」

意外な言葉に、真山は傍らの茂みを振り返った。

黒い闇が、更に真っ黒な闇を吐き出した。

「殉を病院に運んだのはお前だろう。すまない」

漆黒の影が二つに折れると、黒装束の堀川烈は頭を下げてみせた。

真山は構えを解かなかった。言葉とは裏腹に、堀川の放つ殺気は些かも衰えていなかったからだ。

「彼はいい男だな。貴様の弟にはもったいない」

「似てないとよく言われたよ、うっとうしい親戚連中にな」

世間話のような会話を交わしながら、二つの影は緩やかな円を描き始めた。

ゆっくりと影が回る。

街灯も無い坂の途中、せいぜい8m四方程度の空間で、それでも二人の間合いは変わらなかった。

漆黒の男の手から、いつか長く冷たい一条の光が伸びていた。

奇妙な湾曲を持った鉞状の刀。

ククリと呼ばれる異国の山刀であった。

「ククリナイフか」

真山が言った。緊張を隠した口調だった。

東洋の反り返った刀や西洋の直刀に馴れた者には、内側に向かって曲がったその刀身は恐ろしく危険なものであった。

間合いが読めない。

読めたとしても、生と死を分かち紙一重の所で読み間違える危険を常に秘めた形状だった。

その特異さから、古代より暗殺者が好んで用いたきたのがこの刀であった。

「貴様らしい得物だ」

言ってから、口中が乾き切っているのを真山は感じた。

「これは仲間のものだった」

堀川がボソリと呟く。

「蜂の巣になって死んだよ。そいつは形見だと言ってこれを俺に託した」

「貴様に仲間なんぞいたのか。誰とつるもうと何処だろうと殺せりゃよかったんじゃないのか、鴉！」

真山が吐き捨てた。

言葉と一緒に『気』の塊を眼前の堀川に叩きつける。

普通なら何か…姿勢や気合いや構え…が乱れる程の気を受けても、堀川は微動だにしなかった。

「奴らと一緒に戦い右目をなくした。アラーとやらはこの程度の生け贄で俺を生還させた。どうやら俺にはまだやる事が残っているらしい」

真山は構えを解いた。足の運びが止まる。

自然体。

両手はダラリと軀の脇に垂らしていた。

申し合わせたように堀川の動きも止まった。

.....

「お前を斬りたい」

暫くして堀川が言った。

「だが刀が言ってる、弟を助けろと。力になってやれと」

刀の先で道の彼方を指し示した。

「いけ。旅館の脇の小道を下った所に小屋がある。女はそこだ」

「いいのか？ 決着を着けなくて」

「この件が片付いて殉が無事に東京へ戻ったら、その時殺るさ。いけよ」

「…貸しておくぞ、鴉。東京で会おう」

真山は前だけ睨みながら走り出した。

堀川の脇を擦り抜ける時、彼が小さく呟いた。

腕をあげたな

走り去る真山の後ろ姿を見送るように、能面のような顔が一瞬、歪んだ笑みを浮かべた。

◇

衝動。

右手が、衝動と共に堀川の腕を持ち上げつつあった。

あの男を殺せ

好きなだけなぐれ

切り刻め、血を啜れ

肉を喰らって身体じゅうを朱に染めろ

それがお前だ、『鴉』と呼ばれたお前の本性だ

聞き覚えの無い誰かの声。

ぎりと歯を噛んだ堀川は、沸き上がる衝動に抗しきれず走り去る真山の背にククリナイフを投げようとした。

ガツンという衝撃。

見上げればナイフは右肩の上に浮いていた。

誰かが彼の手を強く掴んでいたのだ。

がっしりと手首を握った腕の付け根を目で追った。

彼の左腕だった。

闇の向こうから、朧気に異国の声が語りかけてくる。

レトウ…

レトウよ…

遙か海原の彼方、東の国の偉大な戦士よ

お前は何の為に

誰のために

刃を振るうか

血を流すか

自分か

それとも…

右手首を握った左腕をゆっくりと降ろしながら、堀川は声の主へ…今はいない戦友へ言葉を返した。

化けてでるのはイスラムの流儀か、アリ

貴様は部族を率いて天国にでも行け

俺は地獄行チケットを予約済みだ

乾いた笑い声が聞こえた。

レトウよ…

貴様が天国を語るか

地獄を語るか

知りもしないものを口にするんじゃない

「なら貴様はどうなんだ！」

ぶんと刃音を立て、叫ぶ堀川が闇を切り裂いた。

「部族を皆殺しにされ、たった三人でアメ公どものベースに殴り込んで、ボロ雑巾のように死んだ貴様はエラそうに俺にあの世を語って聞かせられるというのか！？ 答えろ！ アリッ！！」

黒々と広がる虚空に、堀川の叫び声突き刺さり吸い込まれてゆく。
声がカラカラと笑った。

レトウよ…

何処へゆくか、我々には決められぬ

貴様は、貴様の成すべき事を成せ

終わりの日が訪れた、その時に…

また会おう

友よ

声が遠ざかり、消えた。

「友、か…」

真山が走り去った、その道の彼方を見据えながら堀川は苦笑した。

「俺はただの死神だよ、アリ」

眩きながらククリナイフを背中の鞘に納めた。

「弟だけは生き続けて欲しい。だがそれも、死神には過ぎた願いなのかも知れないな」

数瞬の後、彼の姿は闇の中へと溶け込み消えた。